

ホームページへの掲載		
済	7月 15日	掲載予定

岐阜県立飛騨高山高等学校

学校長 河渡 正史

学校住所 (岡本キャンパス) 高山市下岡本町2000-30 電話 0577-32-5320

(山田キャンパス) 高山市山田町711 電話 0577-33-1060

- 1 会議の名称 平成30年度岐阜県立飛騨高山高等学校 学校評議員の会議 (第1回)
- 2 会議の構成 委員 伊藤 順子 (有)ドラッグいとう 専務取締役
小林 光士 飛騨ミート農業協同組合連合会 代表理事常務
横畑 守 岐阜県指導農業士
杉山 和宏 (株)高山電材 代表取締役
坂下 桂子 アトリエ リーベル

学校側 河渡 正史 校長
田屋 雅樹 副校長 (全日制山田キャンパス)
金子 佳弘 副校長 (定時制・通信制)
田口 実 事務部長
池田 哲也 教頭 (全日制岡本キャンパス)
加藤 久視 教頭 (全日制岡本キャンパス)
大森 賢一 教頭 (全日制山田キャンパス)
垣下 大吾 教頭 (定時制)
中田 和美 教頭 (通信制)
荒川 一弘 教諭 (全日制岡本キャンパス・進路指導主事、記録)
- 3 会議の目的 学校運営等について、地域住民や有識者から幅広く意見を聞き、地域社会からの支援・協力を得て、開かれた特色ある学校づくりを推進する。
- 4 会議の開催 平成30年6月12日(火) 13:30~15:30
飛騨高山高等学校 岡本キャンパス副校長室
学校評議員5名と学校側10名が出席
- 5 会議の概要 (進行 加藤教頭)
開会の挨拶 (田屋副校長)
学校評議員の委嘱 (学校長)
自己紹介
授業参観 (岡本キャンパス5時限目の授業を見学)
学校説明 全般 (学校長) 全日制 岡本キャンパス (池田教頭)
全日制 山田キャンパス (大森教頭) 定時制 (垣下教頭)
通信制 (中田教頭)
授業参観の感想及び学校への意見・要望等
閉会挨拶 (金子副校長)

(1) 授業 参観 岡本キャンパスの第5限の授業と施設・設備を見学

(2) 学校長挨拶・学校説明

本校は、平成17年に旧高山高校と旧斐太農林高校が統合し、今年度で14年目になる。連携、融合、進化を柱にして取り組んできた。本日授業参観をしていただき、その成果として、生徒の積極的に話を聞く姿勢に、生徒が自慢の学校、生徒の夢がかなう学校が具現化されていると思う。また、地域との連携を大切にしてきたので、飛驒の将来に必要なとされる学校を目指していきたい。

昨年度は全日制292名の卒業生の内、4人に1人が3年間皆勤だった。部活動では、全日制に限らず、定時制、通信制においてもバドミントン、卓球という競技において全国大会、東海大会に出場した。また、昨年度は、動物研究部は全国1位になった。今年度も野球部は飛驒地区大会において3年連続優勝、ハンドボール部は県大会7年連続優勝、インターハイ18回出場、弓道部女子は今年度初めてのインターハイ出場という実績を残した。進路状況に関しては、約6割が進学、4割が就職である。昨年度は120名が就職をした。その内の7割が地元就職であった。定時制も地元7名、県外1名、通信制は地元6名、県外3名という状況だった。まさに地元認められ、地元の将来に必要な人材の育成という本校の役目を果たしていると自負している。

教育方針に関しては、昨年度から引き続き学業と部活動や生徒会活動は独立して分けるべきではないという文武不岐の方針を継続する。定時制、通信制は武を就業アルバイトに置き換え、教育活動を実践していく。教育目標として自己肯定感を高める指導を掲げ、定時制においてはわかる授業の充実、通信制は気長、丁寧、親切をモットーに取り組んでいる。

次に、本校の課題として大きく2つのことが考えられる。働き方改革が進んでいる中、残業の多さは依然としてなかなか解消できていない。生徒に軸足をおいた指導を教職員にお願いしているが、管理職としては教職員の私生活を守ることも責務の一つである。教職員の健康面の改善ができなければ、世間からは学校という職場がブラック企業であるようなイメージが持たれ、教職員志望の学生数の減少やそれに伴う教育のレベルダウンを憂慮しなければならない事態も考えられる。業務の効率化とともに、教職員には自身の健康管理への意識改革を勧めているところである。まず具体的な方策としては、今年度、勤務時間外では責任を持った保護者対応が困難であるため、夜間の留守番電話を設置したい。次に、部活動は生徒、教職員の健康を配慮し、休養日を設定した。平日1日、休日1日、年間約100日の休養日を目標としている。5月の育友会総会で保護者の方々にはこの件について説明させてもらった。7月には文書にて全保護者にお願いする予定である。もう一つの課題は少子化による学校規模の縮小問題である。飛驒地区内の高校1年生は5年後には300人、13年後には現在の2/3まで減少する。学校規模の縮小はやむを得ないが、本校の役割は飛驒の地を支えていく人材の育成である。飛驒の子は飛驒で育てるためのより良い対策を考えていかなければならない。以上の2点に関して、後ほど忌憚のないご意見をお伺いしたい。

(3) 今年度の学校状況の説明

<全日制 岡本キャンパス> 池田教頭

全日制岡本キャンパスは女子が約70%を占め、明るい雰囲気のある学校である。85%の生徒が高山市の出身である。進路状況は、7割が進学、3割が就職である。進学者の約半分が4大、短大、残りの半分が専門学校に進学する。昨年は普通科、情報処理科で8名が国公立大に合格できた。全ての教育活動を通して、生徒の自己肯定感を高め、「社会的な自立」を支援することを教育目標に掲げている。たとえ遠くに進学しても、将来、地域に戻ってきて地域の良さを高められるような人材の育成を進めていきたい。普通科は基礎基本の徹底と丁寧な個別指導を重点的に取り組んでいる。2年間NIE (Newspaper in Education) 活動に取り組み、新聞を活用し生きた知識を学んでいる。商業科は検定取得を柱として学習している。昨年度は、ビジネス科全員が全商3種目以上合格という、本校始まって以来の快挙を成し遂げた。商品開発も活発で、昨年度はトマトを原料とした茜小町というまんじゅうを開発した。生活文化科は、専門高校地域連携推進事業の指定校として地域のプライダルをテーマに2年間研究活動を行った。今年度は自主的に五節句をテーマに新たに研究を開始している。

課題として、授業目標の明確化、ペア学習等を取り入れたわかりやすい授業の推進に取り組んでいる。また、丁寧な個別指導に基づいた進学実績づくりと情報モラルの向上も今後充実しなければならない課題である。

<全日制 山田キャンパス> 大森教頭

全日制山田キャンパスでは、農業のスペシャリスト育成を目標に専門教育を行っている。園芸科学科は野菜、果樹の生産から加工までを学び、特にGAP認証取得への取り組みを重点的に頑張っている。その研究のために今年度は青森県への見学にも出かける予定である。生物生産科は、今年度より「飛騨牛」という学校設定科目を設定し、鹿児島県へ勉強に行く予定である。環境科学科は女子が少なく生徒募集において不本意な状況があるが、就職、進学ともに進路指導は充実している。進路は、4割が進学、6割が就職である。昨年度は、園芸科学、環境科学科から2名が国公立大学に合格した。全科共通の学習活動として農業クラブ活動がある。県大会にはじまり、全国大会まで続く活動である。また、今年度もオランダ、ブラジルへ2名が県主催の研修で行くことになっている。全体的に女子生徒が増加傾向にある。下呂市からの生徒が少ないので、下呂地域への広報活動を強化したい。授業前の学習目標の提示や板書をしっかり取れる等の自主的な学習態度の育成を重点的に取り組みたい。キャリア教育の充実を図り、専門学習を活かした4年制大学への進学指導も充実させたい。

<定時制> 垣下教頭

教育目標は、全日制と同じであるが、定時制の特色である「社会人としての」という文言を追加している。しかしながら、88名の在校生の中で、社会人は少なくなり、ほとんどが10代の未成年の生徒である。昨年度より、入学生が急増し、新たな課題も出てきている。70%の生徒が昼間コンビニ等のアルバイトをしている。定時制の特色として、定時制教育振興会の存在がある。地域の33社の企業にご支援いただき、行事等の充実に役立っている。今年度は安全安心に学習活動ができるように、学校アンケート調査や懇談等を頻繁にすることで生徒の理解と学習支援を推進している。授業のルールとマナーを教員、生徒がともに作成し、授業規律の確立を目指している。すべての授業をチームティーチングと習熟度学習で行い、わかる授業の推進をしている。個別支援の充実を図るために、特別教育支援員の積極的な活用もしている。進路指導上の課題である自主的な職業選択を促すために、今年度よりハローワークを見学することになっている。また、定時制に入学する生徒は、不登校を経験した生徒も多く、学習の空白期間がある。基礎基本の定着を第一に、主体的に学ぶ力を養うことも今後の課題である。

<通信制> 中田教頭

気長、丁寧、親切を合言葉に飛騨地区県立高校最後の砦という矜持をもって一人ひとりを大切に育てている。現在の通信制課程は、家庭の事情等の理由で高校で学ぶことがなかった大人がもう一度学びたいという高校から、ほとんどが未成年の生徒で20代前半の生徒が1割くらいの年齢構成の高校へと変化している。通信制に通ってくる生徒は心に何らかの傷を持ち、何年間かの不登校や引きこもりを経験してきた生徒の割合が増えている。そのため、自己肯定感を高めることを目標としての取り組みをいくつか行っている。昨年度より、自己を知り、他人のとの関わりを高め、自他ともに認めあえることを目的とした「ソーシャルスキルトレーニング」を学校設定科目として開講している。生徒会を中心として、通信制の生徒には身近な古切手を集め、障がい者の理解のための啓発活動を援助する資金とする社会奉仕活動を実践している。他者から感謝されることで、自己肯定感を高める一助としている。通信制では、単位を習得するだけではなく、地域社会人として貢献できる人を育てていきたい。スクーリングには出席できても、通信制の基本スタイルである自学自習でのレポート提出が困難になっている生徒も多くなっている。そのためUDL (Universal Design for Learning) を今後より一層充実させたいと考えている。

(4) 授業参観の感想および学校へのご要望・ご意見等

意見1

生物の授業について、最初、黒板で何を行っているのかわからなかったが、最後にすべてのことがつながっていることがわかって面白かった。

学校側

ある項目を、学習後に概念図を書くことで学んだ知識をまとめ、有機的に結びつけることで自分の中で昇華していく手法である。

意見2

1年生から3年生の授業を見学させていただいた。3年間でずいぶん大人になることに驚いた。ゴミがなく学校がきれいで学びやすい環境で生徒がのびのびしていた。きれいな環境でなければ良い学習はできない。

意見3

選択授業が多く、先生からの話を聞く形ではなく、ペア学習で自分の考えを話していた。今の勉強の仕方は昔とかなり違うと感じた。

意見4

聞く一方の授業から一緒に考え、言葉だけではなく体を使った授業を見学させてもらった。個々の生徒へのきめ細やかな少人数指導ができていた。コンピュータの授業で「販促」という言葉が出てきた。かなり現実に沿った具体的な授業ができていると感じた。

意見5

若い先生が多く、活気があり、先生と生徒との年齢が近く、授業内容が生徒に入っていくやすい。素直な生徒で返事がしっかりできていることに感心した。コンピュータ室の環境が充実していた。

(5) 働き方改革及び少子化対策へのご意見・ご要望等

学校側

丁寧なテストや授業プリントづくりを実践しようとするとう授業研究が永遠に続いてしまう。時間を区切って効率を上げる働き方の工夫についてと少子化にともなう今後の学校運営に関するご意見を伺いたい。

意見 1

少子化は社会現象であるので、止めようがないが、子どもが少ないからこそそれを逆手に取って、地域に貢献できる人材の育成や中身の濃い授業に力を入れて生き残っていくべきである。

意見 2

教員のリフレッシュが大切である。働く人に心の余裕がなければまともな仕事はできない。教員が自分の子どもを育てやすい環境づくりも少子化対策につながる。

意見 3

農業も自然相手なので8時間以内の労働は不可能であり、残業は当たり前の世界であるが、時間のやりくりが必要であり、それは教師にも当てはまることである。

意見 4

ビジネスならば1時間の仕事を50分にするには効率を上げて、同じ量を処理するという方法が成り立つが、相手が生徒の場合それは難しい。教員の数が圧倒的に足りない。部活動と授業を同時に指導することは働き方改革と言われても不可能である。

生徒が減る一方で生徒の多様化が進んでいる。保護者からは個々の特性に合わせた指導が要求される。教師の仕事はますます大変になるのではないか。

意見 5

部活動を教師が指導することは難しい。外部コーチやOBの積極的な活用を促すべきである。部活動の休息日の設定は良い取り組みである。

少子化で学校が減ることは仕方がないことである。専門的な部分が強みとなるような学校づくりをお願いしたい。

6 会議のまとめ及び閉会

本日は貴重なご意見をいただきました。学校で十分検討したいと考えております。評議員の皆様には7月に学校評価アンケートをお願いすることになっています。ご協力をお願いします。

第2回は1月25日(金)の学習成果発表会の日に開催する予定です。